



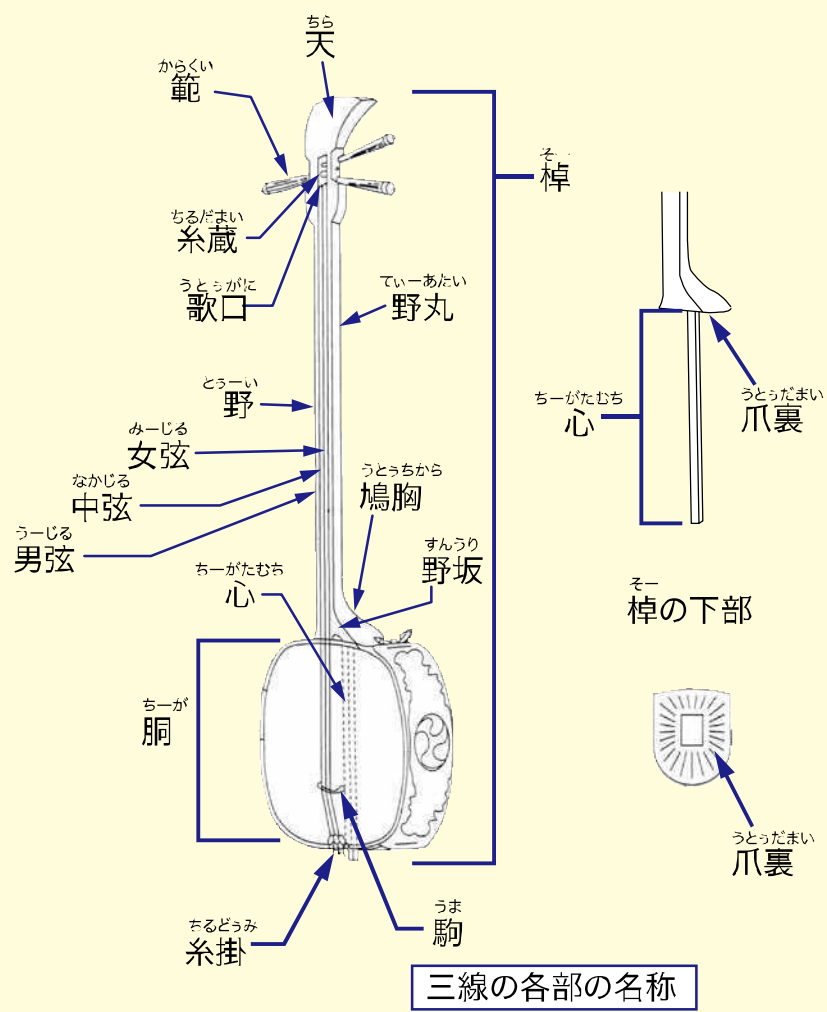
三線の各部位の名称

ためになるかも！ちよこつとコラム



かつて沖縄の三線を研究した方々は、三線の各部位名称に和名が使われている部分もあることから三線は中国からまず日本に渡り、それから琉球へもたらされたと考えていました。しかし現在では、中国の三弦、沖縄の三線、そして日本の三味線の長さや大きさ、さらには演奏法などを比較して、中国から琉球、そして日本へ渡っていったことが定説となっています。

- くら (ちら)
- のり (からくい)
- いとくら (ちるだまい)
- うらぐら (うとうがに)
- さそ (棹)
- みーじる (女弦)
- なかじる (中弦)
- うーじる (男弦)
- ちーが (胴)
- うま (駒)
- いと (糸)
- はとむね (うとうちから)
- のさか (野坂)
- いとがけ (ちるどうみ)
- つめ (爪)
- てがけ (ていーがー) などです。



三線の各部の名称

現在では、しまくとぅばの名称と和名両方が使用されていますが、実演家や三線製作に関わっている方々は、しまくとぅばでいうことが多いようです。やはりしまくとぅばで三線の部位を表現すると、沖縄伝統の楽器だということが実感されますね。

【参考文献】
池宮喜輝。1954年。『琉球三味線宝鑑』。東京沖縄芸能保存会。



沖縄の三線は、棹の形状から大まかに7つの型に分類されます。

それぞれの型は、元となった三線の製作者の名を冠しています。型の古い順に、南風原型、知念大工型、久場春殿型、久場の骨型、真壁型、平仲知念型、与那城型となります。

フェーバラ
①南風原型
名工 南風原作
・最も古い型
・棹が細身で天の曲がりが少ない
・野坂は大きく曲がる

チニンデーク
②知念大工型
初代三絃主取の知念作
・棹は太め
・天が広く曲がり大きい
・中央に稜線がある
・鳩胸が盛り上がる

クバジュンデン
③久場春殿型
久場春殿作
・南風原の系統
・最も太い棹
・天は扁平で曲がり少ない
・野丸と鳩胸の区別ができない

クバフニー
④久場の骨型
久場春殿作
・最も細い棹
・南風原型をひとまわり小さくした感じ

マカビ
⑤真壁型
名工 真壁里之主作
・棹は細身
・天は中弦から曲がる
・糸蔵が短い
・開鐘と呼ばれる三線は、ほぼこの型

ヒラナカチニン
⑥平仲知念型
名工 平仲作
・棹は細身
・天が大きく曲がり、中央がやや盛り上がる
・鳩胸に丸みがない
・知念大工型の系統

ユナー
⑦与那城型
名工 与那城作
・棹は太め
・天は糸蔵の先から曲がる
・糸蔵が長め
・鳩胸も大きめ

※マカビをマカベ、ユナーをヨナーと呼んだりしますがこれは誤りではなく、しまくとぅばか日本語かの違いです。



沖縄の三線は、棹の形状から大まかに7つの型に分類されます(本文159ページ)。琉球国時代、それぞれの型は、考案した名工の名前からつけられました。三線を学んだことのない素人には、見分けがつきにくいですが、三線職人や実演家、三線愛好家の方々には味わいが異なるものだといいます。その7つの型を聴き比べてみるのも面白いかもしれませんね。現在でも三線職人の方は、7つの型を基に三線を作っています。型に応じて各部位の寸法が異なるので、製作する三線の型が決まったら、図面と型紙を使って棹の正しい寸法を木材に書き写していくことから始めるということです。

この7つの型の中で、最も古い型が「南風原型」(本文168ページ)で、18世紀初め頃には、南風原という三線作りの名人がいたということが伝わっているようです。次に登場してくる名工が知念筑登之。この知念の作った三線が「知念大工型」(本文167ページ上)です。この二人の名工のことは首里王府の正史『球陽』1710年の条に「始めて三弦主取を置く」という項目があり、「往昔の世、素、三弦有り。いまだいづれの世にして始まるかを知らざるなり。近世に至り南風原なる者有り。善く三弦を製す。其の韻声嫋々として絶えず。遠く四境に聞こえて、世の三弦と音声相異なるなり。今亦知念なる者有り。よく三弦を造り、是の年に至り、擢られて其の主取となる。」(「三線の来た路」(池宮正治)より引用。沖縄県立博物館発行『特別展 三線の広がりと可能性展』所収)と記されています。南風原と知念が最初の三線製作者ではなく、もっと古い時代にも三線作りをしていた人々がいたようですね。名もなき三線製作者たちの結晶が、「南風原型」や「知念大工型」となったのではないのでしょうか。その後、久場春殿や真壁里之子、平仲、与那城という名工たちが登場して5つの型を制作することになるのです。

この7つの中で、現在でも最も親しまれ普及しているのが「真壁型」(本文170～171ページ上)です。真壁型には「五開鐘」(本文162～166ページ上)と呼ばれる名器があり、その名の由来として、「尚穆王代、首里王府の別邸であった御茶屋御殿に、真壁里之子の作った三線を集めて弾き比べをした。次第に夜も更けていった中、多くの三線は夜が更けるにつれ音色が悪くなっていった。しかし、その中で、暁を告げる開静鐘(ケージョーガニ)の音が響きわたる時間に

なるまで、美しい音色を奏でていた三線が五挺残った。この五挺を真壁作の優秀なものとし、『五開鐘』と呼ばれるようになった」という言い伝えが残っています。この「五開鐘」の中でも名器中の名器といわれるのが「盛島開鐘」(本文164ページ)です。1927(昭和4)年に、読売新聞社から『日本名物宝物語』という書が出版されました。この本は日本の名家といわれている家系に伝わる家宝を紹介したのですが、この際、尚家は三線を紹介しています。他の名家が甲冑や書画、刀剣などを出している中、三線を紹介したのは、全国広しといえども沖縄の尚家だけだったのです。それほど、琉球・沖縄の人々の三線に対する愛情と熱意は特筆すべきものがあるといえるでしょう。三線の名器に対する憧れと、その美しい音色や姿形の魅力は、沖縄の人々の心を捉えて離しません。



三線の7つの型、五開鐘についての紹介はここまで。実際に文化財の三線を見てみよう!



【参考文献】
 『三線の来た路』(池宮正治)より引用(所収: 沖縄県立博物館編、1999年、『特別展 三線の広がりと可能性展』、沖縄県立博物館) 宜保榮次郎著、1999年、『三線のはなし』、ひるぎ社刊